

## シンポジウム「動物園は野生動物を救えるか 新たなる動物園への道」

### 「ヤンバルクイナの絶滅を回避するために 国立動物園への願い」 長嶺 隆

沖縄は特殊な地理的成り立ちを持ち、多くの固有種が存在します。本島には肉食獣がいない、優しい自然ともいえます。また高温多湿なヤンバルは大きな河川がないにもかかわらず命の水瓶ともいわれています。

「どうぶつたちの病院 沖縄」はイリオモテヤマネコと沖縄県北部の山原（ヤンバル）で絶滅危惧種ヤンバルクイナの保護活動をしています。

1981年のヤンバルクイナ発見以降、日本では鳥類の新種の発見はありません。しかし、集落の人は「アガチ」といい周知のことでした。ヤンバルはヤンバルクイナのような飛べない鳥の北限地でもあります。ここには餌に困らない水辺と休息できる豊かな森林があるということです。

しかしながら発見後もヤンバルクイナは減少し、生息地は徐々に北へ追われています。捨て猫の増加も影響していました。ノネコをなくし、捨て猫ゼロの地域を作ろうという活動の一環で飼い猫の不妊化やマイクロチップを導入。その結果捨て猫が減り、人家近くの草地で繁殖が見られるようになりました。また草地に生息するハブとの関係上計画的草刈りを導入。地元集落のスローガンは「ヤンバルに棲む動物にはヤンバルで生きる権利がある」です。

この活動がヤンバルクイナ生息地に広がり、合同のルール作りとして猫飼養条例ができ、猫にマイクロチップ導入。年間400頭の野猫捕獲数が10頭前後に減少しました。

ヤンバルクイナの交通事故対策として、行政もアンダーパス、側溝改良などの取り組みを行い、これが地域活性化に繋がり、また他の動物にも好影響を与えています。救命救急センター、リハビリセンター等を設置し飼育下繁殖を取り組むなど地域的な盛り上りをみえています。

ハブ対策として1910年にわずか17頭導入されたマングースは1990年には北部までその被害を与えるまでになりました。2006年にはヤンバルクイナは700羽台まで減少した。飼育下繁殖も考え、国頭村で周囲2kmにわたるハブ防護フェンス設置。この中では生息個体数も増え繁殖がみられました。現在環境省や沖縄県は年間130万個のマングースワナを設置しています。

ヤンバルクイナの人工ふ化は多摩、上野、井の頭など動物園の協力を得てふ化率が100%近くまで上がり、生息域内でも生息域外でも繁殖の目処が立つようになりました。このように幾重にもわたる保全活動が必要で、また死亡個体の細胞保存もその一つです。2004年には飼育個体0が、現在では約80羽と増えています。このような取り組みの結果、ヤンバルクイナの生息域南下が見られるようになりました。

私たちの事業は多くがつまみ食い状態ですが、保全活動には調査、繁殖、保護活動など統合的組織化が必要だと思えます。ボランティアではその体力に限界があるからです。

それぞれに原因、対策を追求するための専門チームが必要で、私たちが国立動物園に期待をかける思いがここにあります。

